

江戸時代、ヨーロッパで唯一日本との通商関係を維持したのがオランダだった。1602年に設立されたオランダ東インド会社は、1609年平戸に商館を開設した。以後会社か解散する1799年まで、日本に来たオランダ船はすべて、東インド会社が仕立てたものだった。商館は1641年には長崎の出島に移転し、以後長崎が日蘭関係の舞台となる。

オランダ東インド会社は、オランダ共和国から大きな権力を与えられた特許会社だった。バタフィア（現ジャカルタ）を拠点に、ヨーロッパとアジアを結ぶ交易のみならず、アジア域内貿易を通じて巨大な利益を上げており、日本商館もそのネットワークの一端を担っていた。

オランダの帆船はバタフィアから年1回南の季節風で夏に到着し、北の季節風で帰帆する。来航する船の数は、17世紀には5隻から10隻程だったが、1715（正徳5）年正徳新例により年に2隻と決められ、1790（寛政2）年の貿易半減令以降は、1隻の年もあった。

日本商館の主たる業務は、来航する船の持ち渡り商品を販売し、帰り荷を入手して積み出す貿易と、商館長の江戸参府であった。出島移転後はオランダ人が自ら商館外での販売や集荷に従事することはできなくなり、長崎会所による貿易の体制が整う1715年以降は、取引は会所との間で行われる。日本商館は各地商館の中でも小規模で、船の出発後出島に残るのは商館長ほか10名程だった。貿易実務や商館の監視も含めた管理は、オランダ通詞・出島乙名など長崎の町人身分の役人たちが、商館に関わる様々な労務は、長崎の都市住民が担っていた。

オランダ船が日本に運んだ主要な商品は、17世紀には中国産の生糸や絹織物、18世紀以降は生糸は減り、中国やアジアの絹や綿の織物、東南アジア産の砂糖、中国やアジア各地からの薬種類となる。日本側には特筆すべき輸出品がなく、オランダ船が持ち出すのは17世紀には主に金・銀だった。貴金属の大量の海外流出を懸念する幕府によって銀の輸出が禁止され、度重なる改鋳で小判の品位が下がると、18世紀には銅が主要な輸出品となる。

東インド会社が広大な地域に展開する多くの船と人員を有機的に運用するためには、情報が確実に中枢に集まるしくみが必要だった。バタフィアに置かれた総督府は、各地商館に指示や注文を送り、各地商館からは書翰・日記・帳簿などにより活動の成果が報告される。バタフィアではそれらを経営判断に用いるとともに、本国の重役会に総括書翰に取りまとめて発送した。

日本商館に伝来した文書は、すべて日本から搬出され、現在は日本商館文書という文書群として、ハーグのオランダ国立中央文書館に所蔵されている。日本商館文書は、商館の業務構造を反映する多様な文書が系統的に残存しており、各地商館の文書としては、質量ともに最大のものと言ってよい。また、会社時代と会社解散後の文書が連続的に残っている点でも稀有の文書群といえる。主要な文書の種類としては、商館の公務日記、決議録、受発信書翰控簿、貿易基幹帳簿（仕訳帳・総勘定元帳）、船荷送状及び船荷証券、注文書、参府及び贈物経費計算書、各種補助帳簿・計算書類などをあげることができる。

オランダ東インド会社は早い時期から複式簿記を採用していた。日本商館においても、バタフィアを本店とする支店帳簿として仕訳帳・総勘定元帳が毎年作成されており、その大半が現在も残っている。これらの帳簿類を使うことで、どのような商品が取引されていたのか、数量や価格、さらに個々の商品の産地や仕様について知ることができる。これは、日蘭貿易の実態を解明するのみならず、バタフィアの帳簿と合わせて見れば、モノのグローバルな移動の分析にも資する情報となる。また、数字ばかりでなく、日本人がどのような品物を求めていたのか、あるいは日本人と出島のオランダ人の間に行なわれた贈答のありようなども見ることができる。江戸時代の出島に駐在したオランダ人たちが几帳面につけた帳簿は、日記や書翰などと組み合わせることで、文化交流史、社会史等の研究材料ともなり得る重要な史料なのである。